

## 学生とかけて雑巾と解く

松井圭介

生命環境科学研究科講師

### 比文の理念？

比較文化学類の教育理念は「学際性を有した国際的に活躍する教養人」を育成することにあるそうだ。「あるそうだ」とは、はなはだ無責任な物言いではあるが、そのような学生は残念ながら比較的少数にとどまっている。

しかしながら受験生や入学直後の学生に、比文の受験動機を尋ねると、異口同音に「学際性」や「国際性」に惹かれて受験したという。確かに学類のパフレットをみるとそのように謳われている。そうだとすれば、勇躍比文に入学したはずの有為な若者が、いつしかその理想を日常生活の倦怠のなかに忘却し、気がつくとも無知の知らぬ単なる無知のまま、上級生になっている。やや乱暴な言い方であるが、こうした迷える子羊のような学生が後を絶たない。

学生もただ無為に過ごしているわけではない。クラス連絡会などの場で、学類教育

に対する学生側の意見を聞くと、判を押したように、「専門的・系統的な知識が身につかない」「何を学修してきたのか実感がない」といった厳しい意見が寄せられる。いずれも学類教育の根幹を揺るがしかねない耳の痛い意見である。

無論、学類の理念を体現してくれるような立派な学生も存在する。伝統的な学問の枠組みに飽き足らず新しい知の体系の構築に興味をもち、自由に学問ができる雰囲気謳歌している学生。しかしこうした学生はどちらかといえば少数であり、カリキュラムを自分で作っていく「自由さ」に戸惑いを感じ、達成感を味わっていない学生が相当いることは事実であろう。

こうした現象は何も近年になって急に表面化したものではない。20年前に自分が学生であった頃も全く同じ状況であった。専攻分野が定まらないのはご愛嬌。卒論でプロレスの文化論をやっていた友人が、何食

わぬ顔をして大手の大学で人文地理学を教えている。私も然り。学生時代にはほとんど地理関連の授業を履修することはなかった。かつて自分が履修放棄した科目を今、平然として学生に教えているのである。恐るべきかな。

もっとも今の時代はカスタマーサービスをおろそかにして大学は成り立たない。どうすれば学際性というセールスポイントを活かしつつ、専門的な教育を施していくことができるのか。私が試行錯誤しつつ取り組んでいる授業を紹介しよう。

### 学生をイジメル

「最初は楽だと思っていたのですが、最後は本当にキツかったですね」「この演習のせいで私は他の科目の単位を落とししました…」年度末の授業時に学生がこうした感想を漏らすのを聞くと、思わずほくそ笑んでしまう。グループワークの最終レポートは字数制限なしのガチンコ勝負。なかには卒論顔負けの力作を提出するグループもある。目の下に大きな隈ができている学生もいる。明らかに睡眠不足なのだろう。「いやあ、大変だったね、お疲れさまでした」こちらは笑いをかみ殺すのに必死である。

私は同僚の森本健弘先生とともに、1年次生を対象とした文化地理学入門演習を担当している。比文では16ある専攻分野がそ

れぞれ、新入生向けに演習科目を開講している。学生はこれらの中から任意に6単位(2科目)以上を取得することが義務付けられており、大学生としての基本的な知の技法を身につけることが期待されている。同時に教員からすれば、専攻分野を紹介するアンテナショップの性格をもつ。

1学期は森本先生がご担当で、比文において学習・研究していく上で必要な、自ら調べ・書き・発表し・討論する態度と技術の基礎を育てることを念頭においている。文化地理学ということで、広い意味での場所・地域・空間に着目して文化現象をみることに主眼があるが、文化地理学の内容・手法にはこだわらず、プロセスを楽しむことを目的としている。

### 入門演習のねらい

2・3学期は私の担当となる。ここ数年は継続して、文化地理学に関わる具体的なテーマを投げかけて、学生が自ら構想して課題を達成することを主眼にしている。受講生は例年約30名。学生は各自の関心に応じて一班4～6人程度のグループに分かれる。近年は「場所の魅力を探る」という総合テーマで、例えば「東京」や「つくば」、「聖地」などのキーワードを与え、そこから自分たちで研究課題を見出させている。

「東京」を例にとれば、魅力ある場所とし

て、「秋葉原」や「六本木ヒルズ」、「吉原遊郭」、「台場」などを研究対象地域として学生が選択し、地理的な特性を描くことを通して、それらの場所がもつ魅力を分析することになる。演習の最終的な成果は必ず論文の形で結実させる。

とはいえ学生たちは、地理学の専門知識があるわけでも、深い関心を持っているわけでもない。なかには鉄道のことならなんでも知っているといった具合の地理オタク系の学生もいるが、この手の学生は近年めっきり減少した。受講の動機を尋ねるとむしろ、入学時には地理にそれほど関心はなかったものの、オリエンテーションなどで先輩から得た情報をもとに、履修する学生が多いようだ。怖いものみたさということか。

2・3学期を通して、各グループ4回の口頭発表をさせる。論文の構想発表に始まり(1回目)、先行研究の論文紹介(2回目)、研究成果の中間発表(3回目)と回を重ねるうちに、おぼろげに自分たちの研究の輪郭が見えてくる。当初はこちらの説明にも半信半疑で、威勢のいいことを言っても及び腰。万事受身の態度で歯がゆかった学生たちも、ひとたび研究対象に興味を持ち始めると俄然、力を発揮する。研究方法から資料収集と分析、配布資料やスライドの作成、プレゼンの技術にいたるまで、メンバー同士で

討論を交わしながら、次第に自分たちの型を見出していく。

重要なことは、グループ間で適度にライバル心を煽ってやること。受験生時代に培われた競争心がメラメラと甦ってくるのだろうか。こちらが何も言わなくても、自学自習で調査票を作成し、フィールドワークに赴くのである。ミソは男女を適正な配分でグループに分けること。あとは学生同士、勝手に化学反応を起こしていく。ほとんどの学生が大学の近隣に居住しているので、時間の制約なく自主的にミーティングをすることも可能だ。ここまでくれば教員の務めは終わったも同然。大所高所から暖かく見守り、ゼミ時にそれとなくアドバイスするだけでよい。ゼミ発表の他に一度、休日を利用して現地視察会を企画し、全員で各グループの対象地域を巡検する。

最終の発表(4回目)は合宿形式(1泊2日)で行っている。草津のセミナーハウスを利用することが多いが、非日常的な空間で時間を忘れて大いに議論し、しばし名湯に浸っていると、一年の疲れも癒されるといふものだ。未成年のため共に飲酒できないのが残念だが…。

## 学生に伝えたいこと

合宿から帰ると、論文執筆が待っている。締め切りは合宿の2週間後。文科系の学生

は共同で論文を書く経験が少ない。苦労しながらも意見をすり合わせ、原稿を作成しているようだ。論文の体裁は比文の卒論に準じている。2年後には取り組まなければならない卒業論文のリハーサルとの位置づけからである。これまで10年近く担当してきたが、未提出のグループは一つもない。

提出された論文を読んで、想像以上の力作に出会う感動も幾たびとなく味わった。至福のときである。もっともそうした学生たちは、得てして文化地理を専攻しない。反対に論文の出来は思わしくないのに、その後も卒業までべったりまとわりついてくる学生もいる。マーケティング的にいえば明らかに失敗している。

ただこの演習を通して、学問の楽しさ、おもしろさ、そして難しさを味わって欲しいという私の願いは達成されているように思う。自分たちで研究課題を設定して、その課題に対して、適切な研究方法を模索し、必要な資料を入手して、分析・表現する。失敗してもいい。あれこれと頭を使い、手足を動かして自ら掲げた課題に取り組むプロセスを体験することが重要なのだ。

「学問とまさに山登りと一緒に、辛い努力の先に楽しさがあり、達成感を得るためには相応の苦労が必要であることを体得していただけましたか？」などと金八先生も真っ青な臭いセリフを真顔で吐くと、今時

の学生はドン引きしそうだが、意外にも感動した面持ちで話を聞いていたりする。まあ騙されたフリをしているのかも知れない。

ただこちらの思いは伝わっているのだろう。比文の学生たちをみていると、彼(女)らは一様に高いポテンシャルを持っている。しかし残念ながら、そのポテンシャルは大学生生活において十分に発揮されていないように思われる。何が欠けているのだろうか。それは厳しい学問的トレーニングの場ではないか。

「理工系の学生のように、徹夜で実験をして、必死にレポートを作成している泥臭い姿は比文には似合わない」というのは教員の勝手な思い込みで、もっと高い負荷をかけてあげることが学生の満足につながるのではないかと思えて仕方がない。サークルやアルバイトに費やす時間がないほど、勉強させてあげたい。遊んでばかりいた自分の学生時代の轍を可愛い学生には踏ませたくない。学生と雑巾は絞るに限る。

(まつい けいすけ／人文地理学)